



TITLE:

# 学校教育改善ユニット: 寝屋川市立 田井小学校における取り組み 2009年度

AUTHOR(S):

赤沢, 真世

---

CITATION:

赤沢, 真世. 学校教育改善ユニット: 寝屋川市立田井小学校における取り組み 2009年度. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 44-45

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179739>

RIGHT:

## 寝屋川市立田井小学校における取り組み 2009年度

### 1. 活動の概要

大阪府寝屋川市立田井小学校と京都大学大学院教育学研究科との共同研究は、田井小学校が文部科学省委託学力向上拠点形成事業として算数科の研究を開始する2005年度から始められた。そして2007年度は、京都大学大学院教育学研究科の教育認知心理学講座と教育方法学講座の教員・院生による共同グループを中心に取り組みが進められた。

田井小学校における授業研究のあり方は、極めて特徴的である。田井小学校では、ある特定の立場や教育方法による授業づくりに縛られることなく、これまでの研究蓄積としてそうした複数の立場や教育方法から学びつつも、田井小学校として、あるいは特定の学年・クラスに応じて最善の方法を選び創りだすことを目的として授業研究体制が組織されている。したがって、共同研究を進める大学院生は、研究授業と事後の研究協議会への参加に加え、先行研究や教材の提案、そして評価課題の開発などの授業設計の段階から参加することが期待されている。算数科の研究を中心として進められた2007年度までの取り組みの成果は、赤井悟監修・大阪府寝屋川市立田井小学校研修委員会編著『高い学力を育む授業研究』（三学出版、2008年10月）としてまとめられている。

2008年度からは、2007年度までの算数科での取り組みを踏まえつつ、田井小学校の研究が新たに国語科および「読解力」に焦点を当てた体制となったことを受け、京都大学においても国語科あるいは「読解力」の育成に関心を持つ教育方法学講座・教育認知心理学講座の教員・院生が中心となった共同グループを編成した。2009年度も引き続き国語科および「読解力」の育成について、研究授業とその後の研究協議会への参加を軸として共同研究を進めてきている。

### 2. 活動状況

#### (1) 2008年度における共同研究を踏まえて

2009年度は、田井小学校の研究授業・研究協議会の日程と京都大学側の授業日程の多くが重なってしまったことから、大学院生および教員のかかわりが深く持てなかったことが残念であった。しかしながら、2008年度の取り組みが中心に対象とした単元「ごんぎつね」（第4学年）の研究授業および研究協議会へは参加することが出来た。したがって、今年度の取り組みの報告は、単元「ごんぎつね」の授業参観および研究協議会での議論を中心にまとめていきたい。

2009年度の「ごんぎつね」の授業の前提として、まず2008年度の取り組みについて概要を記しておきたい。2008年度には、大学院生の方から、これまでの国語科教育におけるいくつかの各民間教育研究団体の研究蓄積を、単元「ごんぎつね」の具体的な実践を事例とし

て理論・実践の両面から紹介させていただく研修会を持った。そこでは文芸教育研究会や児童言語研究会、科学的読みの授業研究会などの民間教育研究団体、そして現在求められている力としてPISA型読解力が取り上げられた。このような研修会をとおして、「田井小学校として子どもたちに身につけさせたい国語の力（読解力）とは？」という視点の共有を図った。

このような研修会を踏まえて行われた2008年度の単元「ごんぎつね」の研究授業では、子どもの読みや発言が尊重され、子どもたち自身によって進められる授業が提案された。また、授業の参観のあり方においても、そうした子ども一人一人の発言や思考の過程を読み取るために、各学年の教師グループが子どもの各グループを固定的に観察する手法が試みられた。授業後の研究協議会では、個々の子どもの具体的な学びの姿をもとに、本授業でのねらいと子どもたちの議論とのつながりや教師の手立てなどについて議論された。子どもたちの思考や発言を尊重する、という授業づくりの柱が、田井小学校の先生方に共有化・具体化されると同時に、そうした授業における教師の指導性などについて今後研究を進めていく点についても明確となった授業研究であった。

#### (2) 2009年度「ごんぎつね」の研究授業・研究協議会

2009年度の単元「ごんぎつね」の研究授業は2009年9月30日（水）に行われた。参加者は、教育方法学講座の院生2名、認知心理学講座の院生1名、河崎美保助教（高等教育研究開発推進センター）、赤沢真世助教（コラボレーション・センター）の計5名であった。



▶積極的に発言する児童の様子

2009年度の4年生の学年の先生方は、2008年度の各民間教育研究団体の理論・実践紹介をふまえ、児童言語研究会の主張する理論「一読総合法」をもとにした実践を提案された。

「一読総合法」とは、「通読・精読・味読」と学習を進める方法（三読法）が一般的な方法であるのに対し、初めに文章全体を読み結末を知ってしまうのではなく、あるまとまり（「立ち止まり」まで）ごとに一つずつ丁寧に読み進めていく方法である。この理論の背景には、通読をすることで読みの興味を奪うことを

避けること、そして言葉に集中しながら読み進めるなかで、子ども自身が疑問を持ったり先を予想したりしながら読むという、本来の「読み手」としての読みの姿に近づくことができる、という考え方があった。

そこから、田井小学校の4年生の実態に即して、長い文章を読むことが苦手な子どもも集中し、自分の読みを発表し討論する機会を経験させたいこと、読み手として主体的に読む力を持たせたいこと、そして一人一人の読みから得られた心の動きを全体で共有したいこと、という目的を掲げ、今回の研究授業では「一読総合法」を基盤にした実践が計画された。



▶児童の活発な発言をもとに構成された板書

研究授業では、「ごんぎつね」の最終場面が扱われた。はじめて物語の結末を知る子どもたちは、ワークシートに印刷された結末の場面に自分の思ったことや考えたこと、疑問を書きこみながら読み進め、最後まで読み終える。教室のあちこちからは「むなしいな」、「かわいそう」といったつぶやきが聞こえてきた。その後、場面の文章に即して、子どもたちは書き込み・書き出しを行ったところを発表し、積極的に意見の交流を行った。登場人物であるごんや兵十の気持ちについてや、「青いけむり」や「ごん」「ごんぎつねめ」の呼び方の違いなど、語句についても注目する発言が出た。こうした意見の交流の後、授業者の先生からは、ごんと兵十の気持ちのそれぞれについてさらに焦点化するため、本文中の2行に注目させ、そこから読み取れるそれぞれの気持ちをまとめさせた。こうして、子どもたちの個々の読み取りを尊重しつつ、「ごんと兵十がごんの死をもってしかわかりあえなかった悲劇」という本単元の主題の読み取りの共有化を図った。

授業後の研究協議会では、全校の先生方や大学院生などから活発な質疑応答が行われた。なかでも、子どもの発言やつぶやきの豊富さを指摘する意見が多く、多くの子どもが主体的に読めていたことや、本単元・本時の主題を読み取れていたことを評価していた。また、登場人物の気持ちだけでなく、文章中の語句への注目についても交流のなかで意見が出たことが評価された。

一方で、子どもたちの意見や発表を尊重する授業を目指す中で、今回の授業での意見交流で見られた認識の誤りや、討論すべきテーマからの乖離が見られたときの教師の手立てについてはどうすればよいのかという疑問も提出された。また、登場人物の気持ちをまとめる際に焦点化した2つの文についても、なぜその文を設定したのかという疑問が出された。

こうした疑問に対して、授業者および学年の先生方は、当初は多くの子どもの発言を丁寧に取り上げようとしたものの、一つの場面を1時間の授業時間では終えることが出来ず、試行錯誤していくなかで、焦点化する文を設定する手立てを取ったのだと説明された。

このように研究協議会では、子どもの発言や思考過程を尊重しながらも、実際の授業では時間の制約もあることから、教師は教材研究を徹底し、本時で最低限押さえておくべき点を絞っておくこと、そのための手立てを用意しておくことの重要性が指摘され、全体に共有化された。

### 3. まとめ—田井小学校の共同研究から学ぶこと—

これまでの田井小学校との共同研究から、私たちは次のような点を再認識することができる。第一に、理論・実践を相対的にとらえ実践を創りだす一連の研究から、「理論を問い直す視点」が得られるということである。学校現場での「時間」は無制限ではないこと、子どもの討論をうまく方向づけるには教師の教材解釈が極めて重要であることなど、実践に於いては当然の視点であるにも関わらず、理論上十分に深められていない点もある。このように、実際の授業研究を通してみることによって、理論や文献では検討できなかった新たな視点への気づきや、複数の理論が主張する共通点（本質）が浮き彫りになることを改めて学んだ。

第二に、子どもたちが主体として読み進めていく力というのは、PISAや「読解力」として新たな概念として提唱されているかに思えるが、これまでの我が国の研究蓄積においても重要視されてきた文脈があり、全く新しいものというのではないということである。2008年、2009年の「ごんぎつね」の研究授業を通して、さまざまな研究蓄積や時代ごとに導入される新たな考え方を相対化し、子どもたちの実態を見つめたうえで授業実践を開発するという田井小学校の授業研究のあり方は、授業づくりにとっての本質とは何かという点に目を向けるものであることを再認識した。



▶研究授業終了後の研究協議会の様子

2010年度は国語科・「読解力」に焦点を当てた共同研究の3年目の年を迎える。研究授業にとどまらず日々の授業観察や単元構想の段階から共同研究を進めるための体制づくりを行い、より発展的な研究を進めていきたい。

(文責：赤沢 真世)